

- 【委員会名】 税務研究部会
【タイトル】 12月研修会
【日時】 平成18年12月1日（金） PM3：00～PM4：45
【場所】 カメリアプラザ
【演題】 衣遊美（ころもあそび）
【講師】 長沼静きもの学院・副院長 池田絹子氏

長沼静きもの学院

着物を通して日本女性としての優しさ、元気さ、可愛さを生涯教育の中に取り入れたいとして、長沼静により設立され、平成17年10月に50周年を迎えた。創始者の長沼静が平成17年2月86歳の生涯を閉じた後は、孫娘の繭美さんが二代目を襲名し、32歳の若い学院長として走り続けています。

師走の大変お忙しいひと時、フット何かを忘れてのんびりしていただけたらと、会場を包み込むようにお話が始まり、今まで着物を学び、見て経験してきた事を皆様に伝える機会をいただき大変嬉しいですとのご挨拶から話は日本の伝統文化の事に始まりました。

民族衣裳は私達の身近にあり、生活の中に密着しています。着物が何時頃からどのような形になったか、そのルーツをたどりますと、平安時代に生まれた「十二単」という豪華な着物が日本の民族衣裳の最初であり、十二単の下に着ている真っ白な小袖が今の着物となり、十二単の重ねの色目の美しさが、今の振袖の伊達襟や留袖の重ねになっています。時代の移り変わりとともに非活動的なものとして生活が和から洋に変わりましたが、着物には、しきたりがあり、現在の約束事になっています。



今の時代は情報が溢れ、目にする事、耳にする事等の情報をどのように処理できるかなど、課題は山積、日本人がいま伝統文化を見直し身に付けていくとしたら着物であり、日本文化が集約された「茶道」「華道」「書道」を通して、日本人の伝統と未来を見つめて行きたい。

私達の自然への思いの欠如が温暖化を引き起こし、自然を破壊させています。民族衣裳は春夏秋冬の四季にあり、人間も自然の恩恵によって生活を営み自然からまかなってきた歴史があり、その恩恵に対する感謝の念から自然を大切にし、やさしい言葉も祖先から引き継いできたと考えられます。今後も着物の意義と技術を教えながら若い人達が少しでも子育てに役立つようなお話ができるよう努めて行きたい。



「着物についての思い出作り」は感動が一枚の着物に託されています。親と子のつながりは着物を通してみると、一代、二代、四代と直線立ちの着物は、着る人の体型によって解かれ、何度も何度も仕立て直され、それを譲り受ける人への思い出もバトンタッチして行く、着物はそんな役目を担っているとの締めくくりの言葉に、会場は感動、感激の渦に包まれ、活発な質疑応答があり、大変貴重な講演でした。

長沼 静 きもの学院

<http://www.naganuma-kimono.co.jp/index.html>

